

誰かを置き去りにしないために

NPO 法人 Dialogue for People 副代表／フォトジャーナリスト
安田 菜津紀

「どうやら東北で地震があったらしい」。2011年3月11日、そんな知らせを受け取ったのは、フィリピンのルソン島北部、のどかな農村に滞在している時でした。テレビに映し出された光景に愕然としました。どす黒い濁流が電柱をなぎ倒し、家々を呑み込む映像は、現実とは思えないほどすさまじいものでした。

帰国後に私が向かったのは、岩手県の沿岸で最も南に位置している街、陸前高田市でした。当時、夫の両親がこの街に暮らしていたのです。瓦礫に覆われた市街地を目の当たりにした時は、容赦なく吹きつける風の冷たさも忘れ、ただ茫然と立ち尽くしました。義理の父は、勤めていた県立高田病院の4階で首まで波に浸かりながらも、何とか一命をとりとめることができました。けれどもその一カ月後、義理の母は川を9キロ上流にさかのぼった瓦礫の下から遺体で見つかりました。

これだけの悲しみに覆われた街で、一体何を発信すべきなのか、私には分からなくなってしまいました。自分がどれほどシャッターを切ったところで、瓦礫がどけられるわけではなく、避難所の人たちのお腹を満たすこともできないのです。そもそも震災当日、日本にさえいなかったことに、“後ろめたさ”も感じていました。

そんな中で何とかシャッターを切ることができたのは、後に“奇跡の一本松”として知られる海辺の松でした。日本百景にも数えられていた高田松原がほぼ更地になってしまった中で、唯一津波に耐え抜いた松です。瓦礫に囲まれながらも、朝日の中で真っすぐに立ち続けるその姿に、私は夢中でシャッターを切り続けました。この松はきっと、人に力を与えてくれる存在になるはずだ、と。

ところがその写真を見た義父は、険しい表情でこう語ったのです。「あなたのように、7万本だった頃の松原と一緒に暮らしてこなかった人間にとっては、これは“希望の象徴”のように見えるかもしれない。だけど以前の松原と毎日過ごして

きた自分にとっては、波の威力を象徴するもの以外の何物でもない。“あの7万本が1本しか残らなかったのか”って」。

ハッとさせられる言葉でした。自分は一体、誰のための希望をとらえようとしていたのだろうか。この地に生きる人たちにとっての希望だろうか。それとも、外からやってきて「もう辛いものは見たくない」と感じてしまった、自分本位の希望だったのだろうか。なぜ発信する前に、人の声に丁寧に耳を傾けなかったのだろうか、と。

もちろん「一本松」に、街の方々が皆、義父と同じような思いを抱いているわけではありません。ただ、「希望」を伝える声は、どうしても強く響くものです。だからこそ、声をあげられずにいる人々を置き去りにしていないか、という問いかけは欠かせないものでしょう。

あれから10年が経つ中で、「いつまでも被災者扱いしないでほしい、自分は前を向いて進んでいるのだから」という声も耳にするようになりました。大切な投げかけだと感じます。ただ、全ての人が同じ歩幅で歩めているわけではありません。大切なのは“被災者・被災地”と大きな主語でくくらないこと、そしてその中でも取り残されがちな声は何か、より注意深く耳を傾けていくことではないでしょうか。



Dialogue for People

境界線を越えた
平和な世界を目指して

安田菜津紀が副代表をつとめる NPO 法人 Dialogue for People
では、「伝える」活動を通じてさまざまな社会課題に光をあて、
共に生きていくための「対話」をうみだすきっかけを創出します。

「伝える」を「支える」ことから、世界とつながる

マンスリーサポーター受付中!

活動のサポートや、活動の進捗を伝える方法を学びます。
マンスリーサポーターは、毎月1万円を寄付し、活動のサポートをさせていただきます。

Dialogue for People 検索